
フミさんと衝撃発言

青居ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フミさんと衝撃発言

【Zコード】

Z2822U

【作者名】

青居ハル

【あらすじ】

医薬品会社の開発研究員をしている春元フミは今日も研究に没頭してしまう仕事ぶり。

その日、研究室に設置されているテレビからは注目されているサッカーの試合が放送されていた。

「タツミ選手、最後にこの喜びは誰に一番伝えたいですか?」

そんなサッカーの試合終了後に行われたインタビューに選手が答えた発言は・・・

一応連載としますが基本は読みきり。 更新速度ものんびりです。

フミセヒト衝撃発言

某医薬品会社の開発研究員をしている春元フミは研究に没頭し始める
と2・3日は軽く会社にお泊・徹夜コースを平氣でしてしまつよ
うな人物であった。

「春元さんって一人暮らしなの？」

普段から自身のことは多くを語らないフミは以前そんなこ
とを尋ねられたことがあった。

その時の彼女の答えは「NO」だった。

「家族と住んでますよ」

「あ、そりなんだ。でも会社に泊まり詰めで親御さんとか心配しな
い？」

「まあ？」

そこで会話は終了。彼女は再び研究に没頭し始めた。

それ以後、フミの社内での評価は「仕事はできるが面白味のない奴」
と言つたところである。

そんな彼女だからこそ、世間の流行なるものにも全くと言つていい
ほど関心を持たないのも無理は無い。

例え、研究所の一角にあるテレビでワールドカップの中継が放送し
ていようが。

例え、フミ以外の研究員がそのテレビの前で試合にクギ付けになつ
ていようが。

例え、テレビ画面で試合の後半3分前に逆転ゴールが劇的に決まつ

ていようが。

フミはお構いなしに研究に没頭する。

「主任、レポートが書けたのでチェックをお願いします」
「あー・・・・・お、今日のインタビューはタツミか!」

フミの言葉に曖昧に頷きながら（きっと聞こえてはいない）である（う）主任はテレビ画面に夢中である。
画面では主任が言ったタツミ選手が嬉しそうにインタビューに答えている。

「そりゃーそうでしょう。今日の試合が勝てたのもタツミあつてこそですよー。」

「確かに、最後の逆転ゴールは良かつたなあ」

予選とはいえ世界への第一歩を決めた興奮は冷めることなく研究員達は口々にタツミ選手を褒め称えている。

『タツミ選手、最後にこの喜びは誰に一番伝えたいですか?』
『え・・・・・うですね・・・・・』

女性レポーターの質問に尋ねられたタツミ選手は困惑したように言葉を濁す。

「うわあーべたな質問しましたね、このレポーター」
「えーでも女性としては気になりますよー」ここで恋人とか言われた
らシヨックですよー!」
「タツミって女に人気あるもんない・・・抱かれたい男ナンバー1
だっけ?」

「違いますよ。抱かれたい男ナンバー5。でもスポーツ選手では一番ですよ」

「よく知ってるねえ～」

「ファンですから！！」

「でもこう時は『応援してくれたファンの監』とかでしょ？」

などとタツミ選手の回答を先読みする面々の会話を聞き流しつつ、フミはパソコンに向かい合っていた。

時刻は5時27分。就業時間まであと3分だ。

どうやら今日は会社に泊まることがなく定時に帰るらしい彼女はパソコンの電源を落とし始めていた。

『I'mは応援してくれた皆さんに言いたいのですが、今日は妻に』

タツミ選手のその発言にレポーターも、テレビで見ていた研究員達も呆気に取られている。

それはそうだろう。

既婚者ならば当然の発言だが、今までそんな噂など一つもなかつた今をときめく若手サッカー選手が恋人を一足飛びしての妻発言だ。しかしそんな周囲の反応などお構いなしにタツミ選手は言葉を続ける。

『偶然にも今日は妻との結婚記念日ですし、いつも合宿や海外遠征で一緒に居られない分、この喜びを分かち合いたいです』

『そ、ですか・・・素敵な結婚記念日になりましたね』

『ええ。妻にいいプレゼントを持って帰ることができてホッとしています』

これで明日の見出しへサッカーの結果にしり、衝撃発言にしり、一面はタツミ選手で決まりだらう。

「いやああつ……タツミが結婚してたなんて~~~~つ……」

「驚いたな」

「ホントに。今までそんな噂なかつたですよね?」

「さつとトタラメですよー。でつか上げですよー。」

次々に声が上がる中、終業を告げるサイレンが響き渡った。
と同時に帰り支度を済ませたフミが席を立つ。

「お先に失礼します」

テレビの前に集まる同僚達に挨拶をするなり、足早に研究所を去る
うとした。

「あれ? 春元さん今日はもうアガリ?」

同僚の一聲は単なる興味本位だった。
仕事一筋のフミが定時に帰るなど滅多に無いので好奇心が働いたの
だ。

「はい。今日はじこ馳走を作らないといけないの」

「じ馳走?」

「ええ、だつて・・・・・・」

言葉少なめに彼女はテレビを指差した。画面ではちょうどビデオレポータ
ーがインタビューの終わりを告げている最中だつた。

「春元タツミ選手、今日はお疲れ様でした。次に・・・・・・」

インタビューが終わると画面では先程の試合のリプレイが流れ始め

たが、さつきまでテレビに釘付けだった一同はその視線を同僚へと向けていた。

「結婚記念日と同時に試合の勝利祝もしないといけないので」

「では」と研究所を出て行ったフミに残された研究者一同はまるで狐に化かされたかのように呆然と彼女を見送った後、揃って驚きの声を上げるのだった。

タシ//セの怒氣発言

「全国ネットでみんな事を言つたなー。」

試合後、スポーツ記者に囲まれて言つてしまつた発言について監督に怒られた。

春元タシ//自身としては別におかしな事を言つたつもりは全く無い。何せ家族に向けての言葉なのだ。何がおかしいのかサッパリ判らず首を傾げていると、監督は「处置なし」といった感じで諦めモードで首を振つた。

「俺はお前が既婚者だつて知らなかつたぞ」

「あれ？そーですか？？でも指輪だつてしてますよ」

ホラツとタシ//は首からさげているプラチナの指輪を見せた。

「～～～そんなのはお洒落か何かだと思つだらうー・結婚指輪なら指にしふつ！」

「昔はしてたんですけど、無くしちゃこうそなん止めました。フミさんもそちの方が安心だつて言こますし」

フミちゃんと言つのがタシ//の愛しい奥様だ。

そう言えば今日は腕を揮つて「飯を作ると言つていた事を思い出す。

これは怒られている場合ではなかつた。急がねばならない。

「監督、そろそろ帰つてもいいですか？」

「お前には反省と言つ言葉はないのかー？」

「こえ。ただこの件に関しては特に反省するべき点が見当たらぬ

だけです

「あるだろー！あの衝撃発言だつ……」

「はあ・・・・・・」

「明日にはスポーツ紙やテレビの餌食なんだぞー！」

「今更なんですかどね」

餌食は嫌だなあと顔を顰めるタツミに監督は尋ね聞く。

「大体、一体いつの間に結婚なんてしたんだ？普通はチームに一言いづべきだろーに・・・・・・」

ブツブツ言つ監督の言葉にタツミは「ああ」と声を上げた。

「もしかして俺の結婚って最近だと思われてます？」

「当たり前だろー。お前今何歳だ」

「24ですけど、結婚は21ですよ」

「21つ！？」でもお前、確かその頃ドイツじゃないのか！…？」

タツミはざつとドイツのチームでプレイをしており、日本のチームに移籍をしたのはつい一年前の事だ。

「ええ、だからドイツで新婚生活満喫してました。あ、今もですかど」

「・・・・・相手はドイツ人なのか？」

「いえ、日本人ですよ。幼馴染つて奴です」

「もつと言えば俺の初恋の人ですよ」と顔をにやかせるタツミに監督は頭痛が酷くなる。

しかし、コレで自分達が彼の結婚を知らなかつた事にも納得した。

21と言つ年齢には驚いたが、その頃ならばタツミはまだ無名でし

かも外国暮らしだ。日本にいる輩が知るはずも無い。

「で、もう帰つてもいいですか？フミさんが料理作つて待つてるんで」「あー…………むこう。サッサと帰つて奥さんの手料理を満喫しき」

これ以上惣気話に付かぬのはバカラしいの迫い扱うように手を振ると、タツミは「違こますよ」とこつた。

「満喫できるわけ無いじゃないですか。俺はコレからフミさんの手料理を阻止しないといけないんですよ」

「なんだそりや」

「フミさん張り切ると余計なものをアレンジして、コレが微妙なんですよ」

「…………味オノンチなのか？」

「いえ、普通はメチャクチャ上手いですよ。ただ張り切ると微妙」

この前、ソレまでの経験を生かして無難な「カレー」をリクエストしておいたんですけど、それが微妙に甘くって。

何をいたのが聞いたら、チョコレートなんですよ。まあ隠し味にいれるつて聞くしそれ自体は良かつたんですけど、入れた量が半端無くて。

すっげーマズイとか言つたり、いつちも文句言えるんですけど、あの微妙なラインで文句を言つたらフミさん逆切れしそうだし、いや、怒った顔も可愛いんですけどね。

やつぱり奥さんは仲良く過ごしたいじゃないですか。遠征から戻ってきて久しぶりの一人つきりの夜ですよ？

フミさんの機嫌を損ねたら、夜は別々の部屋なんですよ？
生殺しじゃないですか！そんなん我慢できるわけがないじゃないで

すか！唯でさえフミやんせ可愛いの」、あの時のフミやんせまた格別なんですよ！

「…………タシミ、お前早く帰れ」

永遠と続くのではないかと思われる惣『風話』についてに観念した監督の言葉にタシミは晴れやかな笑顔で頷いた。

「じゃあ監督、お先に失礼します」

忙しく扉を閉めて立ち去るタシミの様子に監督は「どうして今まで気がつかなかつたんだうつ？」と逆にやつちの方が不思議に思つのだつた。

タシ//セの怒氣発言（後書き）

とつあえず一回完結。

「メモリー」と書いつ事で第三者的な物語でお送りしました。
少しでも楽しんでもらえたなら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2822u/>

フミさんと衝撃発言

2011年9月5日15時59分発行